

追悼〔元所員〕古川久先生

表, 章

(出版者 / Publisher)

法政大学能楽研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

能楽研究 : 能楽研究所紀要

(巻 / Volume)

20

(開始ページ / Start Page)

197

(終了ページ / End Page)

200

(発行年 / Year)

1996-03-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020483>

追悼〔元所員〕古川久先生

表章

野上記念法政大学能楽研究所が発足した昭和二十七年四月から五十六年三月まで、満二十九年間にわたって能楽研究所兼任所員として御尽力を賜った古川久先生が、平成六年八月十五日に享年85歳で逝去された。八月二十一日に中野区宝仙寺で執行された葬儀に際し、学界・能界を代表する形で表章が弔辞を捧げたので、まずそれを左に転載しておく。

弔辞

古川久先生。今祭壇に飾られている写真は先生の還暦前後のお姿の由ですが、私が初めてお会いした四十代前半の先生も、この写真と同じように貫録があり、すでに大人の風格を備えておられたように思います。もっと若い松本高校教授の時代からそうだったとの声も、通夜の席で聞きました。生涯変わることなく大きな包容力で我々後進を暖かく導き続けてくださった先生のお人柄が、この写真のお姿からも偲ばれて、先生に対する敬慕の念があらためて沸き起こってきます。

古川先生。先生は趣味や関心の広さに比例して研究領域が広く、芭蕉・馬琴・春水など近世文学にも多くの業績をお持ちですし、戦前の岩波の漱石全集以来夏目漱石の研究

にも従事しておられましたが、研究者としての先生の本籍が能楽一なかんづく狂言一にあったことは、誰もが認めるところでは。最初の御著書が『狂言の研究』でしたし、朝日日本古典全書『狂言集』全三冊などを経て、晩年には『狂言辞典』全三冊を完成なさいました。この『狂言辞典』は、最初の語彙編は昭和三十八年の刊行で先生単独のお仕事、二冊目の事項編は小林責・荻原達子氏の協力を得ての五十一年の刊行、最後の資料編は小林責氏との共著の形で、刊行されたのは先生が倒れられた後の昭和六十年でした。とりかかったのは昭和十六年からと聞きますから、まさに先生畢生の大著であり、狂言研究のみならず、日本の文学・言語の研究に大きく寄与する業績でした。このお仕事だけでも、先生の名は研究史上に永遠に残るはずで。

その狂言と先生との深い結び付きは、昭和十一年以来の先代野村万蔵さんとの交遊が基礎だったようですが、狂言に対する世間の評価が不当に低いことへの義憤めいた心情からの深入りでもあるとお聞きしたことがあります。それだけに先生は、狂言の普及に早くから尽力され、昭和三十年代に十年も続いた白木狂言の会への肩入れなどもその一例です。その頃から狂言への評価が格段と高まったのには、

狂言方の努力もさることながら、先生ら先覚者の陰の努力が大きく貢献したように思われます。

先生はまた、円満で公正なお人柄ゆえに、能界・学界のまとめ役や相談役的な仕事を次々と頼まれ、引き受けられました。一々挙げていてはきりがありませんが、能楽の研究者や評論家がまとまって四十一年暮に発足した能楽懇談会の初代の代表が先生でしたし、四十九年に国立能楽堂設立へ向けて文化庁が組織した芸術文化調査会能楽部門の委員にも就任されました。兼任の形で約三十年間お出でいただいた法政大学能楽研究所でも、まとめ役はいつも先生でした。誰からも信頼され、頼りにされる存在でありながら、少しも偉ぶらず、誰に対しても温顔で接する先生の態度を、一緒に仕事を通して見続け、ただただ敬服のほかありませんでした。

そういえば、昭和二十七年に能楽研究所が発足し、私が一緒に仕事をさせてもらうようになった頃の先生は、すでに狂言研究の大家でいらっしやいました。にもかかわらず、若輩の私を対等の同僚のごとく遇してくださる謙虚さには、心底恐縮したものです。ことに驚いたのは、日本古典全書『狂言集』下巻に「天正狂言本」を付載するに際し、底本を所蔵する能楽研究所の専任者が当たるべきだとの理由で、その校注を狂言研究に実績のない私に担当させてくださったことです。まだ二十代だった私は抜擢に感激し、半年ほど狂言の勉強に没頭して事にあたったものでした。

その例のように、先生は後進に機会を与えてその育成を

計る暖かい御配慮を常にお持ちでした。先生の門下から、旧制松本高校や東京女子大学での教え子をはじめ、各方面に多くの研究者や人材が輩出したのは、そうした御配慮に因る点が大きいと存じます。研究者としてのみならず、教育者としても先生は卓越した業績を残されたのです。

古川先生。先生は「古川に水絶えず」の語がお好きで、「水不絶」の蔵書印を使用してもおられました。先生が先達となられた狂言の研究には、愛弟子の小林責氏を初め、後続の研究者が続出しています。御著書『明治能楽史序説』に続く近代の能楽史に関する論考も、先生が病床にあられた間に幾つも発表されています。先生が開拓なさった分野は、まさに「水絶えず」滔々と流れ続く状況になっていきます。その点はどうぞ御安心ください。そして、十年を越える病床から解放されて彼岸に赴かれた今は、先に逝かれた先代野村万蔵さんや松野奏風さん、また先生の跡を追うように一昨日亡くなられた狂言研究者の池田広司さんらと、この世の能界や学界のことを話題にしつつ、白玉楼中で心ゆくまで酒杯を傾けてください。

先生。我々後進の道しるべとなる数々の研究業績、ありがとうございました。また多年にわたる能界・学界への御尽力、御苦労さまでございました。これからはどうぞ安らかにお休みください。さようなら、古川久先生。

平成六年八月二十一日

表
章

古川先生と能楽研究所の関わりについては、『能楽研究』第七号(昭和57年3月)の彙報に先生の退任を報告した中に略述してあるし、詳しく書けばキリがないので、ここではその『能楽研究』のことだけを追加しておきたい。

能楽研究所が紀要を刊行することの必要性を古川先生は早くから強調しておられた。それだけに、昭和49年10月に紀要『能楽研究』創刊が実現したことを大いに喜ばれ、今も本誌が表紙に使用している「能楽研究」の題字を揮毫して下さり、在任中に刊行された第六号まで、毎号必ず論文を執筆して下さった。左の諸論考がそれである。

* 能楽研究所蔵「鷺流狂言水野文庫」目録(創刊号)

* 梅若実の装束買入帳(第一号(昭和51年2月))

* 幕末の観世勸進能(第三号(昭和52年3月))

* 寛永年間の勸進能(第四号(昭和53年7月))

* 『狂言古凶』解説(第五号(昭和55年11月))

* 狂言師としての森川杜園(第六号(56年3月))

御退任に際しての送別の小宴において、「紀要に毎回なにか書いたんだから、最低の責任は果たしたことにしてくださいよ」といった意味のことをおっしゃったことも、記憶にとどめておく。「君も毎号書かなければだめですよ」の気持も籠めた御発言と私は受け止め、これまでのところ曲がりなりにも毎号執筆を続けている。

先生の没後、古川家が各方面に配布した「故古川久の生涯―その略歴と著述目録―」を小林責氏と協力して編み、著述目録を担当したが、二段組26頁に及ぶおびただしい量に圧倒

され、古川先生は書くことが好きだったのだと、あらためて痛感した。その中から、著書の形のものだけを抜き出して列挙しておく。共著者のお名前は省略させていただいた。

(書名・発行年月(年はすべて昭和)・発行所の順)

- | | | |
|-------------------|--------------|------------|
| 『南洋景観』 | 15年12月 | 八雲書林 |
| 『狂言芸談 野村万蔵聞書』 | 21年11月30日 | 生活社 |
| 『狂言の研究』 | 23年3月5日 | 福村書店 |
| 『評註 狂言全釈』 | 25年10月5日 | 紫乃故郷舎 |
| 岩波文庫『梅暦(上)』 | 26年5月5日 | 岩波書店 |
| 岩波文庫『梅暦(下)』 | 26年11月26日 | 岩波書店 |
| 『校注 謡曲狂言新選』 | 27年11月15日 | 武蔵野書院 |
| 『日本古典全書『狂言集(上)』』 | 28年5月15日 | 朝日新聞社 |
| 『明治文化史 9(音楽・演芸編)』 | 29年6月5日 | 洋々社 |
| 『日本古典全書『狂言集(中)』』 | 29年11月15日 | 朝日新聞社 |
| 『日本古典全書『狂言集(下)』』 | 31年1月20日 | 朝日新聞社 |
| 『謡曲狂言選』 | 31年3月25日 | 能楽書林 |
| 『狂言の研究』(増訂版) | 32年10月10日 | 福村書店 |
| 『能楽の鑑賞』 | 33年10月 | 大東急記念文庫 |
| 『能の世界』 | 35年2月15日 | 社会思想研究会出版部 |
| 『狂言の世界』 | 35年12月15日 | 社会思想研究会出版部 |
| 『能・狂言名作集』 | 37年9月15日(共著) | 筑摩書房 |
| 『欧米人の能楽研究』 | 37年12月15日 | 東京女子大学学会 |
| 『狂言辞典 語彙編』 | 38年4月25日 | 東京堂 |
| 『狂言古本二種』 | 39年7月15日 | わんや書店 |
| 『漱石選集』 | 41年6月15日 | 若樹出版 |

- 『狂言の研究―増補三版』 42年3月10日 福村出版
 『世阿弥・芭蕉・馬琴』 42年11月1日 福村出版
 『夏目漱石―仏教・漢文学の関連―』 43年7月1日 霊友会教団事業局
 『くちなしの花』 44年2月20日
 「古川久先生還暦記念出版の集まり」編刊
 『青春への出発―阿部次郎のことば―』 44年2月28日 社会思想社
 『明治能楽史序説』 44年3月20日 わんや書店
 『漱石の書簡』 45年11月10日 東京堂出版
 『夏目漱石―仏教・漢文学との関連―』(増訂版) 47年4月21日 仏乃世界社
 岩波文庫『百人一首一夕話(上)』 47年12月16日 岩波書店
 岩波文庫『百人一首一夕話(下)』 48年1月16日 岩波書店
 『狂言総覧―内容・構想・演出―』(共著) 48年11月25日 能楽書林
 『増補俳諧歳時記萩草(上)(下)』 48年11月30日 八坂書房
 『下間少進集Ⅱ』(能楽研究所編「能楽資料集成」3) 49年10月20日 わんや書店
 『狂言辞典 事項編』(共著) 51年12月 東京堂出版
 『萬間書(鷺流狂言伝書宝曆名女川本)』 52年3月15日
 (能楽研究所編「能楽資料集成」7)(共著) わんや書店
 『謡曲・狂言集』(校注古典叢書。共著) 53年4月10日 明治書院
 『漱石と植物』 53年12月 八坂書房

『夏目漱石遺墨集 第六巻書簡集』 55年3月 求竜堂
 『菊豆腐』 55年4月21日

「古川久先生古稀祝賀出版の集まり」刊

『野村万蔵著作集』(共編) 57年11月 五月書店

『夏目漱石辞典』 57年11月 東京堂出版

『狂言辞典 資料編』(共著) 60年11月15日 東京堂出版

(以上)

書名を一覧しただけでも、古川先生の学的関心の広さが理解できよう。「学者と言うよりは文人であった」と小林責氏の意見(『宝生』平成6年11月号、藤城継夫氏稿)も納得できる。楽しみながら著述にいそむといった感じであった。

先生の研究の主体は狂言であり、その面の業績を代表するのが全三冊の『狂言辞典』であるが、その最終冊は愛弟子の小林責氏との共編の形で、先生が再起不能の状態になられた後に出版された。あの名著に観世寿夫記念法政大学能楽賞を贈呈する機会を失したことを、今は悔やんでいる。それにしても、小林氏を初めとする多くの弟子に囲まれ、多趣味な研究者として多数の著書を残された先生の生涯は、すこぶるしあわせなものであったように思われる。

その古川先生を発足当初の困難な時期から所員(当初は囑託名義)にお迎えできて、長く研究所の「和」の中心になっていただけたことは、能楽研究所にとってこの上なくしあわせなことだった。往年の研究所への多大な貢献に感謝申し上げます。謹んで御冥福をお祈りする。